

東日本大震災追悼記念礼拝

箱舟に乗って

2023年3月10日
日本基督教団福島教会
福島 純雄 牧師

聖書：創世記 6章5節～8節

⁵ 主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、⁶地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。⁷主は言われた。

「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。」⁸しかし、ノアは主の好意を得た。

聖書の一番はじめに置かれた巻である創世記の6章から8章までは、ノアの箱舟と呼ばれる物語が記されています。今日読んでいただいたのはそのはじめの部分ですが、ここには次のようなことが書かれています。神様は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのをご覧になって心を痛められ、人間をお造りになったことを後悔なさって、地上から生き物をぬぐいさろうと決意なさったと。今日読んでいただいた以後に書かれているのは、そのために大洪水が地上に起こり、ノアという人が作った箱舟に乗った以外の生き物はすべて死んでしまったという事です。

正直に申し上げて、東日本大震災から満12年を覚える今日の礼拝で、この箇所から説教することを躊躇する思いもあったのでした。それは、言うまでもなくあの時の地震や津波がこの大洪水の出来事と重なってくるからです。その出来事を今日の聖書は、神様が悪ばかりを企てる人間に心を痛め、箱舟に乗った者以外をぬぐい去ろうとなさったと記すのですが、だとしたら、あの地震も津波も原発事故も神様が私たちを同様にしようと思われて起きたこととなってしまわないのでしょうか。

私自身も震災当日は郡山におり被災した者のひとりですが、すでに半年前から転任が決まっていたため2011年4月からは隣県のつくば市にある教会へと赴任し、昨年の4月にまた福島県へと戻ってきましたが、つくばの教会でこのノアの洪水の物語を説教した後に、匿名でひとりの信徒の方からお手紙をいただいたことがあったのでした。その頃は震災からようやく半年ばかりが過ぎた頃で、震災を人間に対する神様からの裁きだと受け止める考え方が教会の中に見られるようなときでした。お手紙をくださった方は、このような受け止め方にひどく反発し、もし神様が、自ら大洪水や津波を引き越して人間を減ばしてしまおうとするような方なら、もう私はこの方を信じ愛することはできないと書かれていました。

震災に限らずコロナ禍やロシアによるウクライナ侵略といった私共にとって辛い出来事を、私共が信仰においてどのように受け取るのかということは、本当に信仰の根幹にかかわる大事な事柄であると思うのです。ですから、今のようない時期であるからこそ、躊躇しつつですが、今日の御言葉に耳を傾けるのを避けることはできないと私は感じたのです。私の申し上げることは、災禍をどう受け止めるかということへの完全な答えになっているとは言えませんが、私自身の精一杯の受け止めとしてお聞きいただければと願うものです。

さて少し聖書の解説書のようなお話になりますが、このノアの大洪水の物語が文書として編纂されたのは、諸説ありますけれども、ひとつの理解としては今から2600年ほど前の時代だったとされています。著者であるイスラエルの人々は、バビロニアという大国によって祖国を滅ぼされ、今日のイラク辺りにあった地域に捕虜として抑留されてしまったのです。彼らの目の前には有名なチグリス・ユーフラテス川が広がり、その川が何度も引き起こした大洪水の伝説が著者たちの耳に届いてきました。イスラエルの人々はその出来事を、単なる自然災害としてではなく受け止めたのです。それは彼ら自身が祖国を失い捕虜として抑留されていることも重なってきます。そのことにはどのような意味があるのかと、信仰において捉えようと致します。何とかして必死にその意味を探ろうと致します。そこで示されたのが、これは天地の創造者である神様が自分たちの有様に心を痛み、まことに厳しい対処をしようとなさったからなのだという理解でした。

今日読んでいただいた直前の聖書は、当時の人間のネフィリムとなっていたということが書かれています。ネフィリムとは巨人のことです。人がまるで巨人のような存在になって、好き放題のことをしていたのです。この有様に神は心を痛められたのです。そもそも神様はこの世界を良いものとしてお造りになったのです。創世記の最初の1章には、「神は(ご自分のお造りになった世界を)見て良しとされた」ということが何度も繰り返されています。このような良い世界が、巨人のようになった人間によって悪しきものに変えられてしまっているのです。それに対して神様は立ち向かおうとなさいます。創造者としての責任を果たそうとなさいます。

その事が洪水や箱舟に乗った者以外の絶滅という有様を取ることに、確かに私共は躓いてしまいます。しかしそれは文字通りのことというよりは、伝えられた洪水という言い伝えや祖国滅亡という厳しい出来事を、信仰によって受け止めた故の物語なのです。必死にその災難に意味を見いだそうとしたということです。他の人からそうした受け止め方を無理強いされたのではなく、あくまで自分たちでそのように捉えたということです。

このような捉え方は、何度も言うように確かに一方では躓きも生おでしよう。しかし生まれるのは躓きだけではないと思うのです。むしろ希望こそが生じるのではないでしようか。なぜなら、こうした捉え方の根本にあるのは、今も言ったように、神様がこの世界

の創造者であり主人公なのだということだからです。神様がこの世界を良いものにしようとなさいます。巨人のようになった人間の好き放題が放置される世界ではないのです。悪を企てる人間に対して、神様が戦ってくださいます。侵略戦争を起こす巨人のような為政者に対して何もできない私たちですが、神様はいつか必ず打ち勝ってくださるでしょう。そこにこそ、私たちがこの世界を生きていく希望があるのではないのでしょうか。

神様ご自身が、洪水や地震や津波を直接引き起こされるのではないのです。それらはあくまで自然現象に過ぎません。しかし神様はそれを用いて、悪を企てる人間に対して戦い、この世界を再び良いものへと変えようとしてくださるのです。

だとすれば、神様の御心の重点は、洪水を用いて私たちをぬぐい去ろうとされるどころにあるのではなく、むしろ洪水を契機として私たちを新たな者として生き延びさせようとするということにこそあるのではないのでしょうか。そのための助け舟が、箱舟を造らせるということであり、それに応じたノアという一家を救い出そうとなさったことなのです。

8 節に「ノアは主の好意を得た」とありますが、なぜノアだけが洪水の気配などどこにもないのに、大金を費やして大きな舟を作ったのかは何も書かれてはいません。彼は、周囲の人々に恐らくあざ笑われながら一心不乱に箱舟建築に勤しんだのでしょう。そして大水の襲来と共に沢山の動物たちと共にそれに乗り込み、1年以上も漂流をしたのです。それは、巨人のごとくになって自分の好き放題に生きている人々とは、全く正反対の姿です。私はこのノアの姿に、津波や原発事故後にあちこちを漂流せざるを得なかった人々の姿を重ね合わせるのです。また戦火を逃げ惑う人々の姿にも重ね合わせます。

巨人のように好き放題・やりたい放題の生き方を、図らずも手放すしかない時が誰しもにやってくるのです。それが狭く窮屈な箱舟に乗って漂流するということです。それは仮設住宅に住む事であったり、避難先での生活でもあったり、けれども避難者だけではなく私たちすべてが年齢を重ねて老いまた病みつつ、病院だったり施設へと入らざるを得ないことでもあるのです。箱舟に乗って漂流することは私共にとってまことに辛い出来事ではあります。しかしそれこそが、思いがけない神様からの助け舟なのです。私共信仰者にとってはイエス様を信じ教会という狭く小さな舟において、毎週の礼拝生活を営むということでもあるのです。そのような助け舟に乗っていきましょう。